

## 藤田紘康さんへのインタビュー

日時：2021年8月15日（日曜日）

場所：藤田紘康さんの自宅

時間：14:00～16:30、その後も、18:00まで同席者も交えて懇談。以下はインタビューのみの起こし

同席者：野瀬時貞、野瀬さんの介助者の石橋さん、藤田さんの介助者の伊藤さん、酒井さん  
文字起こし：鈴木良

\*藤田さんは発話困難であるため、伊藤さんと酒井さんに交替で復唱してもらった。

鈴木 退院前のお話を聞きしたいのですが、JCILのアテンダント・サービスは高校のときから使われていましたよね。

藤田 そうです。（これ以降、酒井さん復唱）

鈴木 高校何年生のときから、使われていましたか。

藤田 高校3年生から。

鈴木 なるほど、で、宇多野病院に2007年に入院されて、2016年ごろまで、アテンダント・サービスをつかっていたと思いますけど。

藤田 はい。

鈴木 そのときに重度の障害者の自立生活をご覧になりましたか。

藤田 いや、まったくない。

鈴木 ない。じゃ、そのときは、どこか外出するためだけに使われていたということですかね。

藤田 いちおう、授業の一環として、体験してみようみたいな。

鈴木 高校のときですよ。そのあと、宇多野病院に入院されたのは25歳くらいだったとおもいますが、そのときもアテンダント・サービスを使っておりますよね。

藤田 はい、つかっています。

鈴木 そのときも、どこか外出する時に使っていたんですかね。

藤田 はい、そうです。

鈴木 あの一、JCILの交久瀬さんがいつも一緒に行かれていたんですかね。

藤田 そうです。

鈴木 やっぱ、いつも同じ人と行くというのは、安心ですか。

藤田 まっそうですね。呼吸器のことも、慣れているんで、結構、信頼して、頼んでいました。

鈴木 そのときに、宇多野の主治医の先生から何か言われることはありませんでしたか。

藤田 特に何も言われなかったです。

鈴木 あの一、呼吸器の管理とか、痰の吸引とかについて、病院側から、JCILの交久瀬さんに何かレクチャーとかあってあったんですか。

藤田 いや一、まったく、なかった。

鈴木 それについては、ご心配なかったですか。

藤田 いちおう、そのときは、お母さんも、一緒に行ってたんで、吸引とかそういうのは、お母さんがするって、いう感じでしてました。

鈴木 なるほど、じゃ、つねにお母さまと一緒に外出されていたんですね。

藤田 はい、そうです。

鈴木 なるほど。で、2016年に移乗制限されるまでは、いちおう、ぜんぜん、言われることなく、外出を続けられたということですよ。

藤田　そうです。

鈴木　で、2016年の12月に、移乗制限が、されたときに、病院側から、藤田さんに正式な説明ってありましたか。

藤田　いや、とくに、説明はなかったです。

鈴木　でも、いちおう、あれですよ、座談会でもお話されていたように、委員会を通して、そういう決定になったということなんですかね。

藤田　そういうことだったと思います。

鈴木　じゃ、正式の説明がないということは、いつのまにか、というか。いつもだったら、ベッドから車いすに移ることを看護師さんが、お手伝いされると思うんですけど、今日はちょっと駄目ねー、みたないことを言われていたんですか。

藤田　時間的なものとか、人出不足、で、今日は難しいですってということが結構ありました。

鈴木　なるほど。じゃ、そういう看護師さんの対応を受けて、移乗制限を受けているということを感じるようになったということなんですかね。

藤田　そうですね。

鈴木　なるほど。そのときって、お母さまの付き添いがあっても、外出することができなかったんですか。

藤田　病棟の、中で、看護師が、一緒について、散歩とか、そういうのであれば、するのは、散歩するのは、ことは、できたけど、看護師なし、では、散歩もできなかった。

鈴木　そのときですよ。じゃ、それまでは、お母さまが来られて、藤田さんと病棟のなかを散歩することができたんですか。

藤田　そうですね。

鈴木　突然というか、2016年12月にやり方が変わってしまったということなんですかね。

藤田　そうです。

鈴木　で、今は、看護師さんの付き添いがあれば、散歩ができたとおっしゃっていたと思うんですけど、でも、実際は藤田さん、外に出るまで、結構、時間がかかりましたよね。病院の敷地に出たのが、確か、2019年の5月ですよ。

藤田　そうです。

鈴木　ということは、看護師さんの付き添いがあれば、病院のなかは散歩できたけど、でも藤田さんに対しては、そこから、同じように、病院のなかを散歩することができなかったということですか。

藤田　そうです。

鈴木　その理由は何か説明をうけましたか。

藤田　とりあえず、カニューレが、抜けやすいから、やっぱり、看護師もいないと、無理です、みたいな感じで、言われましたね。

鈴木　看護師の方も、そのカニューレが抜けやすいので無理ですって言っていたということですか。

藤田　じゃなくて、主治医の、先生が、から、ずっとその条件を出されて、そういうかたちで、したい、した感じです。

鈴木　ということは、主治医の先生の話では、看護師がつけば、病院の敷地を散歩することは逆にできるということだったということですか。

藤田　そうですね。看護師さんの都合次第。

鈴木　なるほど。ということは、2016年12月から制限されて2019年まで看護師さんがつけば散歩できたのに、できなかったというのは、看護師さんの側の都合ということですか。人出が足りないとか。

藤田　そうです。

鈴木 そういうことなんですね。で、あの一、2017年くらいに、岡山さんが、藤田さんに手紙を書かれたと、おっしゃっているんですけど、おぼえていらっしゃいますか。

藤田 覚えています。

鈴木 そのお手紙って、どんな内容で、どんなふうに思われましたか。

藤田 要するに自己紹介みたいなもの。一度、宇多野へ訪問させてくださいっていう内容で。その時は一度会ってみるだけ会ってみようかなと思っただけで。それ以外にはなかったです。

鈴木 たぶん、その、外出制限、移乗制限になって、大変お辛かったと思うんですけど、そういう思いを病院の中で、共有したりとか、相談したりとか、できる人はいらっしゃいましたか。

藤田 いや、正直、なかなかいなかったです。

鈴木 そのあと、岡山さんたちが、2017年の12月くらいに、野瀬さんを訪問されて、それと同じ日に、藤田さんのところにも来たと思うんですけど、そのときって、どう思われましたか。

藤田 当事者の方も、働いているんだなあと、思いました。

鈴木 その時点で、重度の障害のある人が自立生活をしているっていうことは知っておりましたか。

藤田 重度訪問介護自体が、知らなかったので、その話を聞いたときに、そのサービスが、あるんだなあということを知った。

鈴木 重度の障害者の方が、一人で、24時間支援を受けて、暮らすということを、知ったのはいつ頃ですか。

藤田 2018年何月かは覚えていないですけど、そのときに、24時間、使えるかもしれないって、いうことを聞いて、ちょっと、驚きました。

鈴木 聞いたというのは、JCIL の皆さんから聞いたということですか。

藤田 はい、そうです。

鈴木 ということは、訪問されたその日にお聞きになったんですか。

藤田 そうですね。

鈴木 そうでしたか。その当時、藤田さんを担当されていたのは、岡山さんでしたか。

藤田 そうです。

鈴木 当事者の人が、退院支援をするっていうことについては、どう思われますか。

藤田 ちょっと、不思議な感じがしました。

鈴木 今も、ずっと支援を受けてみて、どう思いますか。

藤田 ま、今は、当事者から、支援、されることは、すごくありがたいなあっていう思いです。

鈴木 普通だと健常者のソーシャルワーカーとか、地域連携室の人が退院支援をするんですけど、健常者ではなく、当事者が行っていることについて、そっちのほうがいいのか、どんなふうに思われますか。

藤田 やはり、健常者よりも、同じ当事者、の方が、生活のこととか、直接、聞いたり、できるので、とても、いいと思います。

鈴木 あと、JCIL の特徴として、いろんな当事者の人が、例えば、岡山さんとか、小泉さんとか、大藪さんとか、も藤田さんのサポートをされているし、あとになって、野瀬さんも入ってきて、いろんな当事者の人が、サポートされていると思うんですけど、そのことについてどう思いますか。というのは、一般的には、一人の担当者の人が、一対一で関わる人が多いんですけど、JC の場合には、当事者が、何人かが、複数で、藤田さんのサポートをされていると思うんですけど、それについてどう思いますか。

藤田 それに関しても、一人の、当事者の、話だけではなくって、他の、当事者の人たちの

話を聞けるというのは、すごく大きかったです。

鈴木 その後、JCの皆さん、毎月、1回くらい訪問されていたと思うんですけど、回数とか時間って十分だったと思いますか。訪問は。

藤田 もうちょっと、時間が、あれば、良かったかなあって、ていう、思いが、ありました。  
(これ以降、伊藤さん復唱)

鈴木 もうちょっと時間があれば、ということは、もうちょっと、相談したいこととか、話したいこととか、があったということですか。

藤田 まっ、そうですね。時間がやっぱり短いと、なかなか、伝えるのにも、時間がかかってしまって、その、ときに、すべて、伝えるのが、むずかしかったんで、そういう思いがありました。

鈴木 皆さん、訪問されていた時に、どんなお話をされていたんですか。

藤田 主に、外出の、こと。

鈴木 だいたい、一回の訪問って、何時間くらいでしたか。

藤田 長くて、1時間、1時間半、くらい、ですね。

鈴木 そのときに、気管切開している人が、地域で自立生活する時に、どんな支援を受けられるのかとか、そういう具体的なお話もお聞きになったんですか。

藤田 はい、それも聞きました。

鈴木 訪問看護とか、訪問診療とか、そういう話も聞いたということですか。

藤田 はい、そうです。

鈴木 そういう話を聞く中で、自立生活ってこんな感じなのかなあていうことが分かるようになったということですか。

藤田 徐々に、なんとなく、こうかなあていうのが、わかってきた、感じです。

鈴木 お話されるときに病室でお話されていたと思いますが、看護師さんとか、他の患者さんのことが気になって、話せなかったという感じはありますか。

藤田 はい、それはあります。

鈴木 やっぱり、話すときは、プライベートな場所で話したかったという思いがありますか。

藤田 はい、そうですね。

鈴木 宇多野病院には、そういう誰か来た時に、誰も邪魔されずに話せる場所はなかったんですか。

藤田 あることは、あるんですけど。なかなか、そういうところを、貸してもらえたりするのは、難しかったですね。

鈴木 JCIL の皆さんが 2017 年に訪問して、その後、2018 年 9 月に、藤田さん、主治医に、退院したいということをお話されていますか。

藤田 はい、しました。

鈴木 そのとき、主治医の方は、どんなことをおっしゃっていましたか。

藤田 やはり、そのときは、一人暮らしは、さすがに、リスクが、高すぎるから、あんまりおすすめてできないって、感じで言われました。

鈴木 相談支援専門員の方には退院の意思を伝えましたか。

藤田 伝えました。

鈴木 そのとき、その人はどんなふうにおっしゃっていましたか。

藤田 僕の、意見を、受けとめて、もらっただけで、特に、何も、言われなかったです。

鈴木 退院を応援するって感じでもなかったのですか。



藤田 いや、応援は、してくれては、いました。

鈴木 でも、やっぱり、主治医の意見が一番大きいということですかね。

藤田 そうですね。まっ、あとは、医療安全委員会とか、そういう、上の方から、そういう、管理とか、しっかりするように、言われてたから、主治医も、相当慎重に、なっていた感じはしました。

鈴木 医療安全委員会というのは、病棟の委員会ですか、病院全体の委員会ですか。

藤田 病院全体の委員会だと思います。

鈴木 そこには、院長も入っていますか。

藤田 でも、副院長とかは、入っているかもしれません。けど、院長まで入っているかどうかはわかりません。

鈴木 あとは、看護部長とかですかね。

藤田 はい、そうです。

鈴木 藤田さんは、2018年9月に退院したいと思ったのは、一番大きな動機はなんですか。

藤田 やはり、精神的な、ものもあって、思い切って、決断した感じです。

鈴木 精神的なものってどういうことですか

藤田 ま、病院の、ルールとか、規則正しい生活とか、自分が、こうしてほしいのに、コールとかおしても、なかなか来てもらえなくて、待つことが多くて、結構ストレスになっていたんで、早く、退院したいなあと、思って、決断しました。

鈴木 最大でどのくらい待たされたことありますか。ナースコールで。

藤田 1時間以上。待ったことがありますね。

鈴木 どんなことを待たされたのですか。

藤田 たとえば、排せつ有的时候に、終わっても、人出が足りなくて、一時間以上、待たされるといことが、ありました。

鈴木 退院して、一人暮らしになって、そういうふう待たされることがありますか。

藤田 まったくなくなりました。

鈴木 その点で、やっぱり退院した方が良かったと思いますか。

藤田 それはすごく思います。

鈴木 JCIL が訪問されたことが大きかったですか。意思を伝えることができたというのは。

藤田 はい。大きかったですね。

鈴木 病院でいろいろなことがあったと思いますが、自立生活をするということが、できるということが、分かったということも大きかったですか。

藤田 はい、それもあります。

鈴木 そのあと、外出したいという手紙を主治医の先生にも出されていますよね。

藤田 はい。

鈴木 そこも JCIL のみなさんと会ったことが大きかったですか。

藤田 大きかったです。でも、JCIL に、関わってもらっていなかったら、でもずっと、抱え込んだまま、辛かったと思う。

鈴木 そのあと、2018年の12月24日のクリスマスシンポジウムで登壇されていますよね。ZOOMで。

藤田 はい。登壇しています。

鈴木 そのあと、主治医や病院スタッフの対応に変化がありましたか。

藤田 かなり、ありました。いままで、言われていたこと、と、変わっていたり、しました。

鈴木 具体的にはどういうことが変わったりしたんですか。

藤田 ずっと、意見とか、要望を、少しずつ、聞いてくれるようになって、退院に向けた、話も、進みやすくなった。

鈴木 外出の面でもそうですか。

藤田 いや、外出の、面では、やはり、退院するまでずっと、止められてました。

鈴木 病院内での散歩はできるようになりましたか？

藤田 そうです。

鈴木 それもクリスマスシンポジウムの影響がありましたか？

藤田 シンポジウムは、かなり大きかったと思います。

鈴木 それで、2019年5月に、藤田さん、3年ぶりに病院の敷地内を散歩されたと思います  
が、そのときどういうふうに思いましたか。

藤田 外に、出れるっていうことは、こんなに、いいもんなんだと、改めて思った。

鈴木 そのときに、付き添いをされたのはどなたでしたか。

藤田 お母さんと、あと、看護師さんです。

鈴木 お母さまは、そのときに何かを言っていましたか。

藤田 それについては、喜んでくれました。

鈴木 藤田さんは、その外出ができなかったときに、お母さまは何かおっしゃっていました  
か。

藤田 やっぱり、なんとかして、外出できないものなのか、と、言っていました。

鈴木 お母さまが主治医の先生とお話されたりとか、要望されたりとか、されていたんですか。

藤田 何度も、しましたが、結局、リスクがあるから、外出、の、許可は、出せません、と、いう感じで、何度も言われました。

鈴木 そのあと、2019年の6月に藤田さんをご出席されたカンファレンスが開かれていると思いますが、そのとき、1回1時間外出したいという話をされていますが、1回1時間というのは、週1回1時間ということですか。

藤田 いや、月1回できないか、ということで、お願いしたんですけど、受け入れてもらえなかったです。

鈴木 重度訪問介護の3号研修のお願いを病院側は受け入れてくれなかったということですかね。

藤田 あまり、そういうことは、前向きに、考えては、もらえなかったです。

鈴木 そのあと、胃ろうの造設が延期されたと思いますが、それはどう思われましたか。

藤田 できるなら、もっと早く、胃ろうを造設して、退院したいなあって、ずっと思っていました。

鈴木 で、そのあと、コロナが、来て、2020年5月から面会が規制されると思いますが、その後、面会規制が緩和することはなかったんですか。

藤田 全くなかったです。

鈴木 玄関先でも会えなかったんですか。

藤田 会うことはできなかったですが、荷物とか、洗濯物とか、そういう必要なものは、玄関先の、受付で、手渡ししたものを、病棟スタッフが、取りに行く、だけで、顔を合わすことは一切できなかった。

鈴木 病院によっては、月に 30 分だけ、ZOOM で面会するサービスを始めたところもあるんですけど、宇多野はどうでしたか。

藤田 そのときは、全く、対応、できていなかった。

鈴木 そのとき、藤田さん、車いすに移乗して、病棟内を散歩することができましたか。コロナ禍のとき。

藤田 いや、一切できなかったです。

鈴木 看護師さんは、相当、忙しく、働いたんじゃないですか。

藤田 そうですね。とりあえず、人手が、足りなくて、もうバタバタ、な感じで、コールとか押しても、なかなか対応してもらえなかった。

鈴木 その中でも、2020 年 6 月に、ZOOM で JCIL の皆さんと、お話をされていると思いますが、このとき、藤田さん、どんなお話をされていますか。どんなふうに思いましたか。

藤田 ちょっと、はっきりとは覚えていません。

鈴木 最初に ZOOM をやったときはうまくいきました。

藤田 なかなかセッティングに苦労しました。

鈴木 それでも、協力して、対応してくれるスタッフもいたということですか。

藤田 そうですね。療育指導室、の人たちが、セッティングとか、復唱とか、手伝ってもらえました。

鈴木 ということは、その方の、都合に合わせて、ZOOM を話するようにされていましたか。

藤田 主に、療育指導室の、方の、都合に、合わせて、やりました。

鈴木 ZOOM で十分な時間お話できましたか？

藤田 できていないと思います。

鈴木 もうちょっといろいろお話されたかったですか。

藤田 はいそうです。

1時間2分後（吸引休憩：7分）

鈴木 JCILの高橋さんが物件の内覧した動画をみながら、物件えらびをZOOMでおこなっていると思いますが、いくつか選択肢があったんですか。

藤田 はい、ありました。（これ以降は、酒井が復唱）

鈴木 選べるのが、できたなあって思いますか。

藤田 たぶん、ここと、もう一つ、二つだけだったんです。どっちかしか選択肢がなかった。

鈴木 どうしてこの場所を選んだんですか。

藤田 決め手は、エレベーター、車いすで、行けるかどうかで、決めた感じです。

鈴木 この物件を事前に訪問して見ることはできなかったんですか。

藤田 外出自体、止められたんで、一切できなかったです。

鈴木 確か野瀬さんも移乗制限がされていましたが、でも、野瀬さんの場合には、一応、今のご自宅を見ることはできたんですけど、それは主治医が違くと、対応が違ってくるということですか。

藤田 ぜんぜん違うと思います。

鈴木 ちなみにそのときは、野瀬さんは行っているのに、なぜ自分には行けないのかと、言わなかったんですか。

藤田 一応、言ってみただけど、やっぱり、コロナ禍でもあったんで、直接、見に行くのは、無理でした。

鈴木 藤田さんご自身は、コロナ禍でも、できたら物件を訪問してみたかったと思いますか。

藤田 やっぱり、動画とかだけでは、広さとかが、分からないので、直接、見に行きたかったです。

鈴木 藤田さん、退院されて、今こうして生活されて、お掃除とか、お洗濯とか、お料理とかって、介助者がされていると思いますが、どういうふうにやったらいいのかって、全て指示をされていますか。

藤田 いちおう、してほしいことは、すべて、指示を出して、してもらっている感じで。まだ、全てが、できているわけではないので。特に、洗濯とか、掃除とか、料理とかに関しては、まだ、指示できないことも、あります。

鈴木 藤田さんとしては、全部のことを指示したいですか。それとも、介助者にやってもらいたいことは、指示しなくても、やってもらいたいと思いますか。

藤田 ある程度のことは、やっぱり、自分で指示を出して、してもらいたい半面、ある程度、任せて、してもらいたいという、思いはあります。

鈴木 いままで病院で看護師さんに指示することはあったと思いますが、退院して 1 人で暮らす方が多くなりましたか

藤田 多くなりました。

鈴木 おそらく、病院だと、掃除とか、洗濯とか、料理も、する機会ってないと思いますが、退院前に、そういう練習というか。CIL だと、自立生活プログラムという言い方をするんですけど、そういうことは今回お受けにはなっていませんよね。

藤田 受けていません。

鈴木 それは受けた方が良かったと思いますか。

藤田 今から思うと、少し受けたかったかなあという気持ちはあります。

鈴木 今、大分の西別府病院の人にインタビューをしているんですけど、大分では、ZOOM でやってきたんですね。ZOOM で自立生活プログラムってやってみたかったと思います

か。

藤田 できれば、やってみたかったです。

鈴木 あと、あのー、今回退院するにあたって、買ったものがありますか？ 新たに。

藤田 あります。冷蔵庫とか、キッチン道具。あとは、レンジとか、炊飯器とか、鍋とか、は、後から、退院してから、少しずつ、増やしていきました。

鈴木 退院前にそういうものって、どんなふう買ったんですか。

藤田 家電に関しては、退院してから、ですが、退院してきて、何日か、食べる物とか、必要な、日用品とかは、入院中に、JCIL とやりとりして、こういうものを買ってきてくださいと、買っておいてほしい、と、お願いして。あとは、何が必要か、っていうのも、メンバーに聞いて、聞いたりして。あとは、任せました。

鈴木 買ってほしいとお願いをして、実際に買いに行ったのは、スタッフの方ですか。

藤田 そうですね。手分けして、買ってきてもらいました。

鈴木 必要なものをメンバーに聞いてというのは、JCIL のメンバーにどういうふうな方法で聞いたのですか。

藤田 正直、退院してから、必要なものって、なんだろうって、思ったときに、どんなものが、必要ですか、みたいな、聞きました。

鈴木 ということは、退院する前の病院のなかだと、何が必要なものなのかとか、選ぶことが難しかったということですかね。コロナ禍ということもあって。

藤田 やっぱり、外出自体できなかつたことで、自分で、家電を見て、買うことができなかつたんで、どういうものが、必要なのか、聞いたり。

鈴木 その後、退院された後、お店に行って、家電を見て、買うっていうことがありましたか。

藤田 いや、研修とかが、生活するリズムとか、組み立てるのが、せいっぱいで、そこま



で考えられなかった。行くこと、外出して、買いに行くことも、余裕がなかった。

鈴木 できれば、病院にいるときに、外出をして家電を見たりとか、家具を見たりとか、そういうかたちで選びたかったということですか。

藤田 もちろん、見て、選びたかったです。

鈴木 あと、介助者の研修ってできなかつたじゃないですか。それで、対面で研修をしてという普通のやり方ができなかつたと思うんですけど、Bed to Bed というやり方になってしまったことについてはどう思われますか。

藤田 思い描いていたものとは違って、ちょっと残念な気持ちもありました。

鈴木 やっぱりそれで介助者全員と会って、研修をして、ということで、やっぱりバタバタして、大変だったなあという思いがありますか。

藤田 とにかく負担が、ものすごく、ありました。結構気持ちの面でも、辛かったです。

鈴木 ということは、やっぱり、対面で、介助者全員に会って、介助者に研修を行うということ退院前に行いたかったということですよ。

藤田 そうですね。

鈴木 それで、もしコロナ禍だった場合に、大分だと、ZOOM を使って、そういう研修ってやっているんですけど、そういうかたちも取れたらよかつたと思いますか。

藤田 思いますね。でもそのときは、そういう、考えは、全く、浮かばなかつた。

鈴木 一番いいやりかたってどんなやり方かをお聞きしたいのですが、自立生活体験室で宿泊して研修するのがいいのか、それとも、新居で外泊して研修した方がいいのか、どちらがよかつたかなあと、藤田さんは思いますか。

藤田 それに関しては、体験室でも、自宅でも、どっちでも、良かつたです。

鈴木 セルフプランって、グループチャットを使って作っていますが、やってみてうまくいきましか。

藤田 なかなか、うまくいかなくて、時間がかかりました。

鈴木 文字をうつわけですよね。

藤田 そうです。

鈴木 藤田さん、文字をうつときはどのようにされていますか。

藤田 マウス、ここに、ボードを置いて（胸の上にボードを置き、マウスを置く仕草をする。）、マウスで、こうやって、操作をする。

鈴木 うまくいかなかったというのは、セルフプランを作ること自体が難しかったということですか。

藤田 けっこう、何回か、これで、作って、やる、区役所、出したけど、もっと、細かく、具体的に、書いてほしい、と、何度も言われて、結構、何回も、やり直した。

鈴木 それをつくるときに、一番良かったやりかたはどのような方法ですか。コロナ禍で ZOOM で会話しながらやったほうがよかったのか。何か他に方法があったと思いますか。

藤田 やはり直接、区役所に、行けた方が、一番良かった。

鈴木 対面で、役所の人と話をしながら、作ったほうがやりやすかったと思うということですか。

藤田 やっぱり、ZOOM では難しい部分がたくさん、あるので、直接、できたほうが、よかったです。

鈴木 やっぱり、発話が難しいということで、ZOOM は難しいということがありますか。

藤田 そうです。

鈴木 たとえば、メッセージャーのグループチャットで、文字を打つじゃないですか。それは結構、役に立ちましたか。

藤田 結構、立ったけど、結構、打つのが、結構、やりとりが多くて、なかなか、打つのが大変でした。

鈴木 そのあと、支給決定の時間がおりて、十分な時間がおりたと思いますか。重訪。

藤田 はい、おりたと思います。(この後は、伊藤が復唱)

鈴木 あと、地域連携室の、担当者の方と、十分にコミュニケーションをとれていたと思いますか。

藤田 まっ、十分ではないですけど、そこそこ、とれたかなあ、って感じです。

鈴木 ということは、藤田さんと担当者の方がお会いして、お話する機会が結構、あったということですか。

藤田 はい、そうですね。

鈴木 退院カンファレンスにもその担当者の方は参加されていますよね。

藤田 はい、されています。

鈴木 たぶん、4回くらいカンファレンスが開催されていると思いますが、回数的には十分だと思いますか。

藤田 いや、不十分でした。

鈴木 もうちょっと、回数があったほうが良かったと思いますか。

藤田 もうちょっと、時間がほしかったです。できれば、もっと、多く、できたほうが、よかったです。

鈴木 お母さまは心配されていませんか。退院するにあたって。

藤田 最初の頃は、心配していましたが、もう途中からは、僕の、思いや、意見を、聞いてくれて、心配を減らすことが、できた。

鈴木 JCIL のスタッフの人たちもお母さまとお話をされていたんですよね。

藤田 はい、そうです。事務所とかに、行って、結構話を聞いたり、ZOOM の時とかも、一緒に参加、してくれて、していました。

鈴木 今回、退院するに当たって、お母さまもご引っ越しされましたよね。

藤田 はい。

鈴木 それは、藤田さんのおそばにいたいというお気持ちで、こちらに来られたのですか。

藤田 いや、そうではなくって、主治医の方から、緊急時とか、何かあったときに、すぐ、対応できるように、近くに、住んでほしいという、条件のもと、一人暮らしする、してほしい、言われました。

鈴木 もしそれが、お母さまが、一緒のところに、来れなかったから、主治医は退院を認めていなかったということですか。

藤田 もしかしたら、その可能性は、十分にあります。

鈴木 お母さまが、こちらにご引っ越しをされたことについては、藤田さんは、どう思われますか。

藤田 まっ、正直なところ、自立生活やから、あまり、近くに、住むのは、考えていなかったです。

鈴木 お母さまはなんか、おっしゃっておりますか。いきなり、引っ越しだと大変ではなかったですか。

藤田 はい、大変でした。

鈴木 城陽市ですよ。

藤田 はい。

鈴木 では、もとに住んでいた家を離れなければならなかったということですね。お母さまにとって。

藤田 はい、そうですね。なので、結構、引っ越しとか、準備とか、結構、大変でした。

鈴木 やっぱり、病院との関係を悪くしないように退院したいという感じはありますか。

藤田 そうですね。あんまり対立した状態で、退院するのは、あまり、いい気はしなかったもので、しっかり、対話して、退院、できて、よかったと思います。

鈴木 宇多野病院との関係はいまでもあるんですか。

藤田 今のところは、ないです。

鈴木 緊急時に入院するとか、通院するとか、そういう関係もないということですかね。

藤田 最終的に、宇多野じゃなくって、他の病院、胃ろうをつくったところの病院に、なります。

鈴木 ということは、病院の関係を壊したくないというのは、医療が必要だからということではなくって、なんか、気持ち的に、対立したくない、という、そういうことですか。

藤田 対立して、退院しても、なんか、もやもやした感じが、残るのが嫌だったので。

鈴木 あと、今、野瀬さんがいろいろピアサポーターとして関わっていると思いますが、野瀬さんが関わるようになって、どう思いますか。

藤田 やはり、近所ということもあって、とても、心強いなあと思います。

鈴木 同じ病院にいた人でもあるということからも心強いですか。

藤田 はい、それはあります。

鈴木 昔、遊んでもらったことがあるというふうに野瀬さん、話されていたんですが、よく遊んでいたのですか。

藤田 はい、そうですね。結構、小学校、の、時代から、一緒に遊んでいた、ということもあって、すごい親近感がありました。

鈴木 なんかそれだけ関係が近いですよ。

藤田 そうですね。

鈴木 関係が近い人の支援を受けるということについてはどう思いますか。

藤田 なんか、とても嬉しかったです。

鈴木 藤田さんが他の障害のある人をサポートしたりすることがありますか。

藤田 まだ今のところは、考えていないですけど、いずれかは、そんなふうになれたら、いいのかなあって、思っている。

鈴木 今、藤田さんの担当をされているのは、段原さんですかね。

藤田 はい、そうです。

鈴木 段原さんには、自由に自分の意見を言えますか。

藤田 はい、いろいろと聞いてもらえるので、とても言いやすいです。

鈴木 それは病院とは違うところですか。

藤田 ぜんぜん、違います。

鈴木 入浴のことで、いろいろ話し合ったりしているじゃないですか。病院って、そういう問題があったときに、藤田さんが中心となって、看護師さんと話し合ったりとか、そういう機会ってありましたか。

藤田 いやなかったです。

鈴木 やっぱり、退院されて、問題があると、みんなで、藤田さんを中心にして話し合うということはぜんぜん違うと思いますか。

藤田 はい、まったく違います。

鈴木 この前に、ここに来させてもらったときに、ガイドラインを作っていたと思いますけど、最初は藤田さんがいろいろ考えて作っていたけど、その後、ちょっとうまくいかない部分があって、伊藤さんとか、酒井さんとか、介助者の人が手助けをしてガイドラインを作られていると思いますが、介助者の方が結構、サポートしてくれることについてどう思いますか。

藤田 いや、とてもありがたいです。

鈴木 ということは、なんでも自分で、当事者が、自分でやるというよりも、ときには、介助者の人が関わってもらって、一緒に考えてもらいたいということですか。

藤田 はい、そうです。

鈴木 前回の話し合いで、訪問入浴の人が同時に異なることを介助をすることがあるということをお話されていて、病院ではそんなことはないと言っていたと藤田さんは話されていましたが、その点については、病院の方がいいと思いますか。

藤田 はい、それは、病院の方がよかったです。

鈴木 お風呂については、病院の方がいいということですか。

藤田 ま、その、介助に関しては、宇多野の方が、いいと思っているのですが、ミスト浴だったので、なんかあんまり、お風呂に入った感じはしなかった。

鈴木 お風呂については複雑ということですね。病院の方がいいことってありますか。これまで地域で生活してきて。

藤田 それはもちろんあります。

鈴木 何が具体的にありますか。

藤田 やはり、いろいろと、安全に、行われていることが、違う。

鈴木 病院のほうが安全に思うということですか。

藤田 とくに、医療面では、安心です。

鈴木 逆に言うと、地域で暮らして、医療面で不安な面もあるということですか。

藤田 退院してから、しばらくは、連携が、なかなか、うまくいかなかったことも、あったけど、それに対して、対応、できるように、なってきた。

鈴木 ということは、入浴以外でも、医療面で何か問題になることがあったということですか。

藤田 身体の変化とかを、変化があったときに、報告を、ちゃんとしてほしいとか。あとは、言っていることが、うまく伝わっていないと、まっそういうことです。

鈴木 主治医の先生も含めてですか？

藤田 はい。

鈴木 田中先生でいらっしゃいますか。

藤田 はい、田中先生です。

鈴木 あと、訪問看護についてもそうですか。響さんでしたかっけ。

藤田 はい、響さんです。

鈴木 やっぱり、なかなか、主治医の田中先生にしても、響さんにしても、うまく伝えられない部分があったということですかね。

藤田 ちょっとした、ズレとかが、そういうことに、つながっていったかなあと、思います。

鈴木 でも今は徐々に慣れてきて、問題が起こらなくなってきていると思うということですかね。

藤田 そうですね。自分自身も、訪看さんと、田中先生。しっかり、連携が、とれてきたの



で、不安は、なくなった。

鈴木 藤田さんのお身体のことや、医療のこととあって、病院の人から、田中先生とか、訪問看護の、人に十分に情報って伝わっていたと思いますか。

藤田 いや、十分ではなかったと思います。

鈴木 カンファレンスの数が4回で少ないですよ。

藤田 少なすぎます。

鈴木 お互いに、田中先生や、訪問看護の人や、介助者の人が、病院関係者の人と、話す機会ってあまりとれていなかったですか。

藤田 僕自身は、とれていないなあという感じが、した。

鈴木 話す機会って、退院カンファレンスの機会だけでしたよね。

藤田 はい、そうです。

鈴木 退院されてから外出って結構されていますか。

藤田 はい、しています。

鈴木 月に何回ですか。2020年10月に退院されて。

藤田 月には2~3回くらいですね。

鈴木 最近、訪問入浴のことで、お身体を痛めて、外出ができないこともでてきたということですかね。

藤田 そうです。後は、気候とかの関係で、外出できていないのもあります。

鈴木 この前、バスを乗るときに、運転が荒い人がいるということをお話されていましたが、呼吸器をつけているということで、対応をちゃんとしてくれなかったことってありますか。

藤田 いや、対応は、しっかりして、くれてはった。

鈴木 今、藤田さん、こちらにいて、自治会に入っていらっしゃいますか。

藤田 いや、入っていないです。

鈴木 災害のこととか、気にされているとおっしゃっていましたが、それは、今後は地域の  
人と話し合っていきたいと思っているということですか。

藤田 いずれかは、そうしていけたら、一番いいなあと思いますが。可能な限りは、ヘルパ  
ーさんと話をして、どうするか、一緒に、考えていきたい。

鈴木 今は銀行に行って、お金をおろすことはありますか。

藤田 今はまだないです。

鈴木 お金の管理はどうされていますか。

藤田 今のところ、ある程度、お母さんが管理しています。

鈴木 病院のときもお母さまが管理されていましたか。

藤田 そうです。

鈴木 いくらかの現金は病室においていましたか。

藤田 はい、おいておりました。

鈴木 不安ではありませんでしたか。

藤田 やはりちょっと不安でした。

鈴木 今は、ご自宅にいくらかを置いておられるのですか。

藤田 はいそうです。

鈴木 まっそのへんは、不安とかそういうのはありませんか。

藤田 不安といえば、不安ですけど、管理できる、力は、つけたいなあと思っている。

鈴木 やっぱり、病院では外出できなくて、退院して外出できるようになって、それはぜんぜん違うかなあって思いますか。

藤田 ぜんぜん、違います。

鈴木 気持ち的にも。

藤田 全く違いますね。

鈴木 地域に来て、一番、嬉しかったことはなんですか。

藤田 やはり、いろいろな人たちとの、出会い、や、自由に、生活が、できるという点では、すごくうれしかったです。

鈴木 お母さまとの関係で変化がありますか。

藤田 やっぱり、病院では、コロナ以降、面会が、できなかったのですが、退院してから、普通に会ったりできるので、変わったと思います。

鈴木 介助者不足で悩んでいる人が一人で暮らしている人の中には多いのですが、藤田さんはそういうご心配はありますか。

藤田 そのあたりは、理解いただいているので、それで困ったことは、今はないです。

鈴木 あと、今、藤田さん、こうやって生活されていて、ZOOM で話し合ったりすることはあるんですよね。

藤田 今のところは、JCIL の、人たちと、したり、後は各事業所の、人たちが、集まって、する、ことくらいです。

鈴木 支援会議で、ですかね。

藤田 そうです。

鈴木 それはそれなりに役に立っていますか。

藤田 はい、役にたっています。

鈴木 オンライン料理対決はどうでしたか。

藤田 僕はまだやったことはないです。

鈴木 そうですか。それは違う方ですね。JCIL って、病院と相当違うと思いますが、どんなことが JCIL は違うと思いますか。

藤田 やはり、僕が、これやってみたいなあということとかを、提案すると、積極的に、やりましょうって、いう、感じで、楽しいです。

以上